

平成22年度企画展



成田市南羽鳥中岫第1遺跡出土  
人頭形土製品

メメント モリ  
**Memento mori**

葬送のかたち

2010年12月11日(土) — 2011年6月30日(木)

メメント モリ  
「Memento mori」とは、「死を想え」という意味のラテン語です。この言葉が「死」について意識されるようになったのはキリスト教的思考によるもので、本来「生」を謳歌する意味合いで使われていました。

今回の企画展ではこれまでの調査成果から、最も普遍的な葬送形態である土葬について取り上げる「土」、権力の出現によって築かれた古墳について取り上げる「墳」、仏教の導入や社会の変化によって興った火葬について取り上げる「火」の3つのテーマを設けて、この地域での葬送のかたちをみていきます。人間存在において不可避な「生」と「死」を過去の人々がどのように考えていたのかということを通して、私達自らの生と死について改めて考える機会として頂ければ幸いです。

# Memento mori

## 葬送のかたち

人類が初めて死者を弔ったとされるのは、今から約6万年前まで遡ります。その後の長い歴史の中で宗教などと密接に結びつき、弔いの行為は世界各地で、独自の進化を遂げてきました。

日本での葬送行為は、約8千年前の縄文時代にはすでに行われていました。権力の出現や仏教の導入など、様々な事由によって葬制は変化をみせますが、その根底にある残された人々の「死者を弔う」という精神は、変わらずにあり続けているのです。

### 土

遺体をそのまま土中に埋葬する行為は、人類が死者を弔うことを始めた当初からみられた葬送の方法で、最も簡素でオーソドックスな葬送形態といえます。

日本においても縄文時代には穴を掘って遺体を埋葬する土坑墓や、貝塚や住居内に埋葬するなどの葬送が行なわれていました。

弥生時代では土坑墓だけでなく、遺体を一度埋めて白骨化させ、土器に入れて再び埋葬する再葬墓、方形に溝を巡らせた方形周溝墓といった葬制が加わります。

その後の時代では、古墳や火葬といった葬送形態が採用されますが、土葬はごく最近まで連綿と行なわれており、人類にとってもっとも普遍的な葬送であるといえるでしょう。



四街道市南作遺跡深鉢出土状況



成田市南羽鳥中岫第1遺跡人頭形土製品出土状況



佐倉市六崎貴舟台遺跡の方形周溝墓群



佐倉市六崎大崎台遺跡航空写真

### 墳



佐倉市飯合作遺跡1号墳



酒々井町上岩橋岩崎遺跡6号墳



成田市龍角寺101号墳主体部



栄町龍角寺尾上遺跡004号址



栄町龍角寺尾上遺跡出土鉄釘

弥生時代以降、盛土をして周囲を溝で区画するという、明らかに大勢の人たちの力によってつくられた墓が現われます。墓は次第に規模が大きくなり、3世紀代には古墳と呼ばれるものになっていきます。

古墳には誰でも葬られたわけではなく、地域の有力者など特定の人たちに限られていました。剣や刀、鏡や馬具、装飾品などの副葬品がそのことを物語っています。また、古墳は亡くなった人を葬る場だけでなく、権力の継承の場であったと考えられています。

古墳の築造は7世紀、天皇を頂点とする中央集権体制が確立していく中で終焉を迎えます。

原始	約13000年前	縄文時代 木戸先遺跡(四街道市) 南羽鳥中岫第1遺跡(成田市) 南作遺跡(四街道市) 井野長割遺跡(佐倉市)
	約2600年前	弥生時代 中期頃→関東で方形周溝墓出現 六崎大崎台遺跡(佐倉市) 六崎貴舟台遺跡(佐倉市)
古代	250頃	古墳時代 飯合作遺跡(佐倉市) 上岩橋岩崎遺跡6号墳(酒々井町) 仏教伝来(538) 龍角寺101号墳(成田市) 龍角寺尾上遺跡 鉄釘(栄町)
	710	奈良時代 大化の薄葬令(646) 僧道昭の火葬(700)←日本初の仏式による火葬 大宝律令制定(701)←喪葬令による葬祭の規定 持統天皇崩御(702)←翌年、天皇初の火葬 龍角寺尾上遺跡 蔵骨器(栄町) 高岡新山遺跡(佐倉市)
中世	794	平安時代 9世紀後半から次第に火葬衰退 『往生要集』(984)←極楽浄土に往生するための思想を説く
	1192	鎌倉時代 松崎Ⅲ遺跡(印西市)
近世	1338	室町時代 14～15世紀、火葬土坑の出現 大菅向台遺跡第2地点(成田市)
	1467	戦国時代 寺請制度(1664)←菩提寺による葬儀の管掌
現代	1603	江戸時代 墓石制限令(1831)←造れる墓石の大きさ等を規定
	1868	明治 火葬禁止令(1874)←衛生上の問題等で一年で廃止 行政による墓地管理(1884) 皇室服喪令公布(1909)
現代	1912	大正
	1926	昭和 「墓地、埋葬等に関する法律」施行(1948)←現在まで続く法律

葬送に関する主な出来事

# 火

日本における火葬のはじまりは、8世紀初頭に遡ります。当初は天皇や貴族などの限られた階層の葬法でした。

14～15世紀には蔵骨器に加え火葬土坑が出現します。これにより火葬は古代と比べて確実に多くの階層に普及しますが、武士・僧侶、それに連なる家臣クラス、さらに有力農民層までの階層に受容されたものでした。

江戸時代に一度下火となる火葬は、明治から戦後に至りようやく階層に関係なく定着するものになりました。

火葬という葬送のかたちは、古代から近世を通じて連綿と続く土葬と異なり、限られた階層の中で消長を繰り返してきました。そして現在に至り一般的な葬法となって定着したのです。



栄町龍角寺尾上遺跡蔵骨器出土状況（土師器小型甕・須恵器蓋）



佐倉市高岡新山遺跡蔵骨器出土状況（灰釉陶器短頸壺・土師器杯）



四街道市堂庭遺跡出土常滑三筋壺（12世紀）



印西市松崎川遺跡出土古瀬戸灰釉四耳壺（13世紀前葉）と常滑壺底部（蓋利用）



成田市大菅向台遺跡第2地点火葬土坑

